

夏休みの仕事【中学年4-(3)】

-自分の生活と重ね合わせ、価値に迫る取組み-

(1) 主題名 家族愛 [4-(3)] 関連項目 [4-(2)]

(2) ねらい 家庭生活に積極的にかかわろうとする態度を育てる。

(3) 資料名 「夏休みの仕事」

(4) 授業の展開例

	学習活動	主な発問と児童の心の動き	留意点
導入	1 夏休みに自分がすすめてきた家庭内の手伝いや仕事を思い出す。	夏休みにどんな手伝いや仕事をしましたか。 ・犬の散歩 ・おふろそうじ ・げんかんそうじ	おおよその内容を把握しておく。
展開	2 夏休みに仕事に対するまさおの気持ちを考える。	夏休み中、どんな気持ちで夏休みの仕事をしていたと思いますか。 ・約束だからがんばろう。 ・役に立ててうれしい。 ・たいへんだなあ。 夏休みが終わったときは、まさおはどう思ったでしょう。 ・よくがんばったなあ。 ・(最後までできて)うれしいなあ。 ・(もうしなくていいから)うれしい。 お母さんの手紙を聞きながら、まさおくんはどんなことを考えていたでしょう。 ・お母さんはそんなに喜んでくれていたのか。 ・これからもやってみようかな。 ・お父さん・お母さんを少しでも楽にしてあげたいな。 ・できることだから、しなければいけないなあ。	まさおの気持ちに視点を当てて考えていく。 子どもたちの実体験の中から素直な気持ちを引き出したい。 まさおの気持ちが変わった理由を深めていくことで、価値に気付かせたい。
開拓	3 これまでの生活を振りかえる。	これまで仕事をしながら、どんなことを考えていましたか。 ・たいへんだなあ。 ・きまりだからやらないといけないな。 ・家の人が助かるだろうなあ。	導入での発表内容を活用する。
終末	4 教師の話を聞く。(講話または手紙)	・家で仕事を続けてみようかなあ。 ・ぼくもやってみようかなあ。	保護者からの手紙を代読する。または、現在、自分が続けていることの体験を話す。

夏休みの仕事

「夏休みに入る前、先生が話された。

「夏休みなので、みんなは家ですごすことになるね。つまり、学校に来ているときより家にいる時間がずっと長くなる。そこで、約束しよう。家に帰って、おうちの人たちが家のなかで、どんな仕事をしているかよく見てみよう。そして、その中で何か一つでいい夏休み中、自分の仕事をずっと続けてみよう。」

「いよいよ夏休みだ。まさおは、たゞそく家人たちの仕事をよく見るひことにした。まさおの家族は、お母さん、お父さん、妹のえみ子とまさおの四人だ。お母さんは、朝六時に起きて、朝ごはんとお弁当の用意をしてくる。昼間は、はたらきに行つて夕方帰つてくる。帰つてくるとすぐて、夕ご飯の用意をして、すんだら片づけと一口中いそがしそうだ。

お父さんは、朝六時に起きて、せんたくをして、朝ごはんを食べてすぐにはたらきに出かけていく。夜は、ふだんまさおがねるまでには帰つてこない。お母さんに聞くと、だいたい十時ごろに帰つてくるらしい。

まさおは、家の仕事を調べていてハッとした。お母さんもお父さんも、ゆつくりできる時間がないのだ。まさおやえみ子がテレビを見たり、ゲームをしたりしているときも、お父さん、お母さんは、はたらき続けていた。そこで、まさおは、先生に言われたように、せんたくものをたたんでおさめることを自分の仕事にすることにした。そして、妹のえみ子もさそつて、いつしょにやるることにした。

夏休みの間、毎日続けるのは思つたよりたいへんだった。それでもまさおは、えみ子と一緒に手伝つてくれてありがとひ。お母さん、すく助かるよ。」

「手伝つてくれてありがとひ。お母さん、すく助かるよ。」

「うしご、いよいよ夏休みの終わりがやつてきた。まさおはえみ子といっしょに、一日もかかさず仕事を続けてきた。まさおは、自分でもよく続けたなあと思った。お母さん、お父さんはすくほめてくれた。でも、明日からは、まさおも学校が始まる。だから、ちよつとわるいよつた気持ちがしたけど、夏休み中といつやくわくだったのせんたくものをたたまなくして、樂になるなあと思つた。

学校では、先生が、「まさおくんは、すくよく手伝つをしたそうだね。あんまりよく手伝つてくれるのでも、お母さんは、『夏休みが終わつてほしくない。それに、しつかり仕事ができるくらい大きくなつてうれしい。』って夏休みの感想を書いておられたよ。」

とほめてぐださつた。おおおは、すくつかつたが、考へこんでしまつた。

その日、お母さんとえみ子が帰つてくるなり、まさおは明るい声で言った。

「えみ子、これからもずっとせんたくものをたたもうな。」

えみ子は、ニコニとわらつた。

活用に生かすための実践報告

「夏休みの仕事」

1 主題の設定

長期休業中、子どもたちは課業日以上に「手伝い」として家庭生活に貢献する場面が多い。しかし、家族にとっては、長期休業中であろうとなかろうと、家庭内の仕事があり、協力して家庭生活を送っている。本資料の登場人物の言動からそのことに気付かせ、子どもたちに改めて自分たちの生活を振り返らせたい。そして、そこから家族の一員として、協力し合って楽しい家庭をつくろうとする積極的な姿勢を持つことにつなげていきたい。

2 指導過程の工夫

子どもたちには、本資料と同じように、長期休業中に家庭内で「手伝い」をするように指導していた。多くの子どもたちにとって、夏休み中の主人公のがんばりは共感できるものであったと推測する。そして、長期休業明けのタイミングを外さないように授業実践をした。そうすることによって、まさに主人公と自分の姿を重ね合わせて考えさせることができた。

終末は、長期休業中の保護者の感想を読み聞かせた。保護者の「ありがとう。これからもよろしくね」という言葉が、子どもたちの意欲をより一層高めていくものと考える。

3 発問の工夫

主人公の気持ちにそって発問を展開した。中でも、主人公が家庭内の自分の仕事につ

いて見つめ直す中心発問では、「なぜ気持ちが変わったか」と問わず、「母の言葉を聞きながらどんなことを考えていたか。」と発問した。こうすることで、子どもたちの多様な考えをひきだすことをねらった。

4 児童の反応（授業後の感想）

- ・ これからも自分の手伝いを続けたい。でも、たいへんだと思う。
- ・ 手伝うことで、おうちの人にも喜んでもらえるし、うれしい気持ちになれる。
- ・ ほめてもらえるとうれしい。
- ・ 仕事をしないとお母さんたちがまた忙しくなる。

5 実践者からの一言

中学年という段階では、意義を理解し自分の手伝いをすすめるというよりも、「家庭で話し合って決められているから」「ほめられてうれしいから手伝う」といった側面が強い傾向がある。

しかし、本実践のように自分のしていることの意義を見つめ直すことで、さらに、自分への自信や積極性を引き出すにつなげていけるものと考える。

終末で、心のノートP73「家族の役に立つこと」の活用も考えられる。

授業の様子を通信などで保護者に伝えることも道徳的実践に向けて、意義深いことだと考える。

（美土里小学校 二井岡直文）